
唄う海のように

下弦 鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唄う海のように

【Nコード】

N2358D

【作者名】

下弦 鴉

【あらすじ】

大切な恋人を失ったその日、私の運命は狂った。悲しみを乗り越えなくちゃいけない。その為に、君との思いで探しに行くよ。

1、初めに一步

君は、覚えてるかな？あの日の事。

私は、その日を思い出すだけで、何だか笑えてくるの。馬鹿な事やってたなあつて。

君が覚えていなくても、私はちゃんと覚えてるよ。

君と過ごした日の事。

楽しかった、日の事。

だから、だからね。

私、決めたんだよ。教えてあげようか？

それはね。

*

真つ白い四角い部屋は、何だか寂しくて、私の心の中みたいだった。出窓に置いてある花も、枯れて見えた。1つのベッドの隣に置いてある、白い棚の上の綺麗な絵。どこの誰が描いたのか、君も私も知らなかったよね。

空っぽのベッドを撫でながら、まだ君がここにいる気がして、何だか切なかつたよ。綺麗にならされたシーツの上を、私が撫でる度に、波みたいな模様を作つてた。私が大好きな、海の模様。だけど、それを共感してくれる人がいない。悲しいな。

「……帰らなきゃ」

急にそう思つて呟いてみたけど、余計に悲しくなつただけで、帰る気力さえ残つてなかつた。だって、まだ信じられなかつたの。かなり危険な状況にあるって事は、知つてたけど、急に君がいなくなるなんて、考えられなかつた。静か過ぎる純白の部屋は、私に何の

言葉も掛けてくれない。早く帰れって言われてるみたいで嫌だった。

「……………何で、一輝かずきなのかな？」

無言の病室は、何も言わない。もし、ここに君がいたなら、きっとこう言ってたよね。

「何でかな？」

「有実うみ、泣くなよ、大丈夫だから」

そう言った君は、酸素マスクをつけて、とても辛そうだった。オペ室に向かうなか、一時的に意識を取り戻した君は、私にそう言ってくれた。とつても嬉しかったけど、でも、やっぱり涙は止められなかった。

だってさ、今度オペをする時、君の体が持たないかもしれないって、お医者さんが言ってたんだもの。それ以来、ずっと心配で。心配で。どうか、もう容体が悪化しませんようにって、寝る前に必ずお願いしてた。でもね、神様なんて、意地悪な人だから、簡単に裏切られちゃってさ。急に苦しみ始めた君に、私はただ、ナースコールに助けを求めただけ。他に、何もしてあげる事が出来なかった。

もし、君が死んじゃったら、私のせいだよ。私が毎日君のところに来てたから、無理させてたんだよね。でも、君が心配だっただけなんだ。私が知らない間に、君の優しい吐息が止まっちゃう事が、何よりも怖かった。嫌だったんだよ。だから、君が死んじゃったら、私のせいだよ。心配してた私を氣遣わせた、私のせい。

「ねえ、一輝。死なないで……………」

「大丈夫だよ、大丈夫。な、笑ってくれよ。お前の泣き顔、嫌いだからさ」

「笑えば、いいの？」

「とびつきりの笑顔……………見せてくれ」

無理して笑った私の顔見て、君も弱々しく笑い返してくれた。それが嬉しかったけど、余計に胸が苦しくなったよ。だって、泣くなつて言ってた君が、泣いてたんだもの。無理して笑っちゃってさ。

そんな事しなくていいから、無理しないで。私は、きっと大丈夫だから。

目の前で扉が閉められて、手術中のランプが点いた時、私は崩れ落ちて泣いた。心配や、不安、君を失う恐怖。それが私に襲い掛かってきたから。

何時間かした頃、君のご両親もここに来てたよ。君は分からなかっただろうけど、お母さん、涙ぐんでたよ。お父さんだって。そんなに心配されてたんだよ。いろんな人に、心配されてたんだよ。だから、君は生きて帰ってきてくれるって、私、信じてた。いつもみたいに、何日かして、目が覚めて、ようって言って、君は笑うんだ。なのに、君は笑ってくれなかった。ずっと待ってたのに、君は寝たままで、起きなかった。信じて待ってた私が馬鹿みたいで、情けなかった。君は死んでなんかいないって。信じなくなかったんだよ。君が死ぬなんて、考えられなかったから。

目を開く事無く、君は延々と眠り続けていた。起きる事を期待して、次の日の朝になるまで、君が目を覚ますのを待ってた。でも、君は静かに眠っていて、綺麗に澄んだ目で私を見てくれはしなかった。

独り、静かな君の居なくなった病室に来て、また涙が出てきた。だって、綺麗に整頓されてたから。乱れたシーツも、あったかそうな掛け布団も、何もかも綺麗にされて。君がいなくなったそのベットは、もう君の事を忘れて、次の患者を待っていた。それが無性に悲しくて、寂しくて。

もう、こうしてはいられない。だって、もうここに来る理由がなくなってしまったから。静かに席を立て、広い廊下に出ると、君のご両親がいた。お母さん、目の回りが赤くなっていたよ。きっと君のために、たくさん泣いてくれたんだね。

「有実……ちゃん、だったわよね？」

「はい……」

「今日から2、3週間後に、一輝のお葬式を挙げようと思ってる

の。そのうち詳細を電話で知らせてあげてから、来て欲しいの。…きつと、一輝も喜ぶと思うから」

「はい、そうさせていただきます。有難うございます」

君のお母さんが言ったとおり、2週間後に君の式は挙げられた。たくさんの身内の方々に、親しい友達の姿もたくさん見たよ。それに、担任だった先生も来てた。みんな黒い服着て、表情まで暗かったよ。……当たり前だよ。人が、友達が死んじゃったのに、平気でいられる訳ないもんね。

何の滞りもなく、君の式は終わった。あつという間の事で、もしかして、これはドッキリなのかもしれないと思ったけど、やっぱり現実だった。頬をつねったら、痛かったから。ゆっくりと目を閉じて、開いても、幻は消えなかったから。

最後まで、君の家の前で立ってたら、また、涙がでてきちゃったよ。それまでずっと忘れてたよ、泣く事。それほどショックだったの。

その日からずっと不登校気味になって、学校に行く事が、とても嫌になった。だって、君のいない学校なんて、ただの檻だよ。仲良しの友達はいるけど、君と話せるから、とつても輝いて見えてたんだ。その輝きがなくなっちゃえば、つまらない所だよ。

一日を自分の部屋で過ごして、ご飯もろくに食べなかったら、5キロも痩せちゃった。元々痩せ過ぎだって君に言われてたのに。何もする気力がなくて、ただゴロゴロしてたら、心配した友達が来てくれた。朋美ともみだった。

「大丈夫、有実？だいぶやつれたみたいだけど……」

「……大丈夫だよ。元気、元気！」

そう言ってみただけど、やっぱり元気が出なくて、余計に心配させちゃったみたい。

「あ、そだ。はい、これ。休んでた分のノート。雑だとか言わないでよ」

「有難う、朋美」

ピンク色したキャンパスのノートが、何だか嬉しかった。

「じゃ、アタシ、塾あるから。また来るね」

そう言い残して朋美は帰っちゃったけど、もつと話していたかったな。君の事について、いろいろ。親友の朋美だったら、きつと聞いててくれただろうから。そしたらきつと、元気になれる気がして。朋美がくれたノートを開けた時、手紙が落ちてきたの。それ、クラスのみんなの寄せ書きだったよ。1つ1つ読んでたら、こんなにたくさんの人に迷惑掛けてる私って、情けないなあって思ったんだ。だから次の日から、少しずつ学校に行くようになったんだけど。

「有実、暗くない？」

そう言われる事が多くなっちゃった。なっさけないよね、ホントに。いい加減、受験生だから立ち直らないといけない事ぐらい、分かっている。でも、どう足掻いても、君を失くした穴が埋まらなくて、心にポツカリ開いた穴が埋まらないんだ。どうしたらいいか迷っている時、また朋美が来てくれたんだ。でも、少し怒ってた。

「何で、そんなにズルズル引きずってるの？一輝君が死んじゃった事は、本当に悲しい事だって分かるよ。でも、そんな有実が悩んだら、きつと成仏できないよ？」

「……ゴメン」

「アタシに謝らないでよ。謝るなら、一輝君でしょ？ねえ、有実。元気出してよ」

「……ゴメン」

「……もういいよ、アタシ帰るね。バイバイ」
心配してくれてるのに、冷たいね、私。謝ってるだけじゃいけない事も、分かってたけど、それを言うための勇気が出なくて。弱いね、私。

何ヶ月も、友達と連絡を取らなくなつて、朋美もノートを届けてくれなくなつてたいつごろか。いつの間にか、誰かからメールが来

てた。お母さんからだった。

そういえば、食事を運んできてくれても、何も話さなかった。ただいまも、行ってきますも、そんなちよつとした挨拶もしなくなつた。まるで、引きこもりみたいに。……その時に気付いたの。私、引きこもりになってたんだって。

携帯を開くと、こつちに向けて笑いかけてくる、私と君がいた。とつても幸せそうに笑つてて、その先に起こる不幸のものの影さえ感じさせなかった。それを見ていると辛くなるから、受信ボックスを開けて、母から来たメールの内容を読んだ。それは、こんな内容だったよ。

『件名 有実へ』

『有実、最近姿を見せてくれないけど、大丈夫？

お母さん、心配だけど、声を掛けるのが怖くてね。有実が、あんなに悲しそうな目をしているの、始めて見たから。どう話しかければいいか、分からなかったの。

そんなに好きだったんだね、一輝君の事を。お母さんには、何も言ってくれなかったでしょ？だから、彼が死んでしまった時に、彼が彼氏だって知って、悲しい反面、嬉しかったわ。だって、いつも『彼氏なんていないよ』って言つて、有実は誤魔化してたからね。

でも、お母さんが言いたい事は、ただ有実が心配つて事だけじゃなくて、旅行にでも出かけて、気分転換してほしいなって、思つてるの。

彼と巡つた所だけじゃなくて、いろいろな風景を見るの。そうしたら、少しは気分が晴れるんじゃないかって。

それで、もし、行く気があるのなら、朋ちゃんを誘つて。もう、朋ちゃんには言つてあるから。行く気がないなら、それでいいからね。

じゃあね、これだけだから。また、メールした時、返事をちょうだい。待つてるわ』

悲しくも、嬉しくもないのに、勝手に涙が流れてきてた。液晶の

画面にその雫が垂れないように、それを拭って、私は決意したんだ。旅行、行ってみよって。君を忘れるためじゃないよ。君との思い出の地に行ったら、この穴が埋まると思ったの。だから、私、旅行に行くね。君も一緒に来てくれるよね。きつと、きつと。

2、二歩目は不安定

旅に出る日の朝に、シャワーを浴びたよ。何だか久しぶりで、とっても気持ちよかった。でも、水の流れる音を聞いている間、君の声がどうしても聞きたくなっちゃって。もう、泣かないって思ってたのに、潤んできちゃうんだ。どうしても。君の些細な一言とか、面白い事、怖い話とかもしたよね。それがさ、今頃になってよみがえってきちゃって。こんなんじゃ、もう一生恋はできないね。未練がましい気がするけど、仕方ない事だつて、割り切つて生きれたらいいなあ。

それからね、髪の毛も切つたの。肩に付かないくらい短く。そしてたら、毛先がびよんびよんはねちゃった。癖毛の事、すっかり忘れてたよ。君にも、この髪の毛、よくからかわれてたよね。寝癖直して来いよつて言つてさ。何だか、懐かしいね。

「有実！ 朋ちゃん来たわよ！」

「うん、ちよつと待つて」

学校を休んでまでは行けないから、夏休みに行く事にしたんだよ。君といるいな所に行った時も、夏だったし。だから、学校はサボつてないよ。もう、サボつてないからね。

君が始めてくれた手提げカバンで行く事にしたんだ。覚えてる？ 取っ手の部分が白いやつ。確か、プーマのだった気がするな。私の好きなブランドだつて、知つてたんだつて。たまたまだつて。ねえ、君はどつちか覚えてる？

「有実い〜！！」

「待つて、もうすぐだから」

鏡の前に立つて、君がくれた髪留めで前髪を止めてみたよ。私、これがお気に入りなんだ。ラメの入った透き通る水色の髪留め。海に似てるからつて、くれたんだよ。君、その時とっても、照れくさそうだったね。

階段を下りて、すぐの玄関に、君の姿を見た気がしたんだ。いつもみたいにラフな格好して、おせえよって、言ってた。でも、瞬きしたらね、消えちゃったんだ。君が居たはずの所には朋美がいて、遅いって、頬膨らませてた。君が来てくれたと思ったのに、瞬きなんて、しなければ良かったのに。そしたら、もつと君といれたのに。

「ほら、有実。早く行くよ、電車に遅れちゃう」
「う、うん」

「それじゃ、行って来ますね、おばさん！」

「いつてらっしゃい、気を付けてね」

「はい！」

「うん、じゃね。お母さん」

あんまり元気よく言えなかったと思うけど、前よりはましになったと思うんだ。だって、何だか楽しみになってたんだ。この旅が。もしかしたら、どこからか君が合流して来てくれるかもしれない。そんな、変な想像してたんだ。こんなお願い、神様だって叶えられないよ。きつと。

電車に乗る前は、だいぶ楽だったよ。でも、どこに行こうか迷っちゃって。適当に電車に乗る事にしたんだ。私たち、スイカだからホントにラッキーだったよ。切符だったら、きつと時間通りに電車に乗れてなかっただろうから。

あ、そうだ。まだ、初めに行く所、教えてなかったよね。まずは、箱根に行く事にしたよ。ここからそんなに遠くないし、君と始めて行った所だって、一番最初に思い出したから。少し、楽しみだな。君がいない事は、とても悲しいけど、朋美がついて来てくれるから、きつと大丈夫だよ。君がいなくても、しっかり生きれるってところ、見せてあげなくちゃ。

「有実、次で降りよう」

「うん」

久しぶりに地面に立った足がね、まだ震えてた。ずっと座りっぱ

なしだったから、少し歩きにくかったな。でもね、町並みが綺麗だから、そんな事忘れて走っちゃった。転びそうになって、朋美に笑われたんだよ。

「今日止まる所、探さなきゃね」

「そうだね。……じゃあ、私と一輝が泊まった所にしよう」

「どこだか覚えてるの？」

「……自信、ないけど」

おおまかにしか覚えてなかったから、はっきり言えなかったよ。君だったら、覚えてたかな？簡単に、こっちだよって、案内してくれたかな？

「有実！」

朋美の手に両頬を挟まれて、怖い顔された時、とつてもびっくりしたんだ。私、変な事言っちゃったかなって。そしたらね、朋美は今度笑って言うんだ。

「またその眉寄せたら、アタシ、帰っちゃうからね」

「眉？」

「そう、眉」

そう言っつて、つんつんつて私の眉間を突付いたの。後から知った事なんだけど、君の事を考えてたり、君の事を思い出したりしたら、私の眉間に皺が寄るんだって。悲しそうな顔してるのに、眉間に皺ができて面白いつて、朋美は笑ってたよ。私には、どこが面白いのか、いまいち分からなかったけど……。

「で、どっち行けばいいの？」

「え？」

「有実達が止まった所。どっち？」

右を指したり、左を指したり、その朋美の動きが面白くつて、何だか笑えたんだ。久しぶりに笑った気がして、何だか驚いたよ。

「……確か、こっちだったと思うよ」

「有実の確かは当てにならないのよねえ」

「だ、大丈夫だよ。こっち、こっちだった」

むきになって言ったらね、また笑われちゃった。そしたら、また笑えてきて、何だか、君を失った寂しさが減っていった気がしたよ。このままいけたら、また、君がいた頃みたいに笑って生きれる気がしたよ。

*

「どうしよう、どうしよう……」

この家に入らないといけないんだけど、僕にそんな勇氣はないよ。何であいつは僕にこんな事頼んだんだろう。確かにあいつとは親しかったけど、あいつの彼女なんかと親しい訳ないだろ。話した事すら、クラスだつて同じになつた事だつてないんだからな。もう。

でも、このままこの家の周りをウロウロしたら、不審者として警察に電話されちゃうかもしれない。いったん引き返して、もう一回来ようかな？……そのほうが、怪しい気がするな。

「……どなた？」

「は、はい！？」

後ろから急に声を掛けられて、思わず声が裏返った。びっくりして振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。高く結われた髪に、白髪が混ざって入るが、綺麗な人だった。

「どなたですか？私に用ですか？」

「……え、いや、あの……」

こんな返事に困っていたら、間違えなく警察を呼ばれる。その前にきちんと説明をしなくては。でも、何て言ったらいいんだ？

「もしかして、有実のお友達？」

有実。そうだ、あいつが言ってた彼女の名前だ。って事は、この人は、あいつの彼女のお母様？だったら、話さなくては。

「あ、と、友達じゃないんですけど。……あの、僕の友達が、その子の彼氏だつたんですけど……」

一瞬眉を寄せたけど、何とか通じたようで、警戒を解いてくれたようだ。

「もしかして、一輝君のお友達？」

「そうです。あ、ぼく、篠山こひやまって言います」

「ささ、やま……君」

「はい。で、あの、急で悪いんですけど、えっと、あの、有実さんはいますか？」

「有実なら、さっき出かけたわよ」

「……出かけた。……どこへ行ったか、あ、出来ればいいんですけど、教えてもらえませんか？」

「どこへって……うーん」

悩むような所へ行ったのだろうか。それとも、実は家出だったりして。だから、返事に困ってるんじゃないか？ だったら、これは、どうやって渡せばいいんだろう。

「ごめんね、行き先は聞いてないの。何か、急用なら、呼び戻しますよ？」

「あ、それなら、いいですよ。迷惑かける訳には行きませんから。あ、帰ってきたら、ここに電話してください」

念のために用意してきた、自分の携帯電話の番号を書いたメモを渡したけれど、見ず知らずの人に、そう簡単に電話なんて掛けてくれるだろうか。はあ、お先真つ暗だな……。

「じゃあ、有実から何か電話があったら、これ、教えときますね」

「有難うございます、それじゃ」

ああ、やっと終わった。何で、全く知らない人と話すだけで、こんなにも息が上がってしまうんだ、僕。そんなに他人が嫌いなのか。人とぐらい、普通に話させてくれよな、まったく。

とは言ったものの、連絡が取れなくちゃ、意味がないな。家で待ってても、どうせ暇だし、僕も後を追いかけて行ってみようか。…

…場所が分からなけりゃ、無意味だな。

「はあ……」

「どした、奈留なる」

「……昼なのに、出てこれるんだな、幽霊って」

「なんだなあ、俺、初めて知った」

「僕もだよ、カズ」

あ、言うの忘れてたけど、僕には幽霊とか、そう言った類のものが見える。ついでに言うと、僕の隣で楽しそうにふよふよしてるのは、一輝。何の未練も残ってないらしいけど、幽霊となった姿で、死んだ日の次の日に、僕の前に姿を現した。で、彼女に渡したい物があるけど、渡せないから、代わりに渡して欲しいって頼まれた訳だから、こんな目に遭わされてるんだ。

「なあ、俺の予測だけど、有実はどこへ行こうとしてるのか分かるぜ」

「……僕にそこに行けと？」

「お、さすがだな、奈留。そのとおりだ!」

「……言つとくけど、僕の家は貧乏だから、そう遠くまで行けないからな」

「ダイジョブだよ。なんとかなるさ」

「ならねえよ!」

周りの事を忘れてカズと話してたから、周囲の目が冷たい。痛いほどの視線の先には、子供連れ。そして、お決まりの台詞を残して去っていった。ああ、こんなトコで、独り言を言ってると思われたら、恥ずかしいと言ったらありやしないよ。

「なあ、頼むよ、奈留。俺が言う場所に行つて欲しいんだ」

「遠くない？」

「遠くない」

「親が心配しても、何とか説得する方法を、教えてくれるか？」

「努力するさ」

「……それが出来たら、成仏できるか？」

「……きつと」

生きている事を噛み締めたくなくて、たくさん空気を吸ってから、

吐いた。見上げた空に、薄っすらと透けるカズの体が重なって、青空が曇った。

「なら、協力してやるよ」

「やった、ありがと、奈留！」

「で、行き先は？」

「それは」

意味もなく耳打ちされた所は、本当にそう遠くなかった。明日にでも、行ってみようと思えるその距離に、そこはある。

いつ会えるか、分からないけど、そこに毎日行って、有実さんに会わなくちゃいけないな。これを、渡すために。

2、二歩目は不安定（後書き）

お久しぶりです。本当は第一話に書こうと思っていた事を、その時に忘れていたので、ここで書かせてもらいます。

前作とはまったく違った、人の死なないものを書こうとしたら、こんな結果になりました。恋愛ものは初めて書くので、まだまだ至らない所があるでしょう。それでも、温かく見守ってやってください。

どうしても文句が言いたい時など、感想にして、私にぶつけてください。返事を書けるよう、きちんとした作品が書けるよう、頑張ります。

3、軽やかに三步目を

それから、私達は、いろんな所を回ったよ。ほとんど、君と来た場所だったけどね。楽しかったよ、懐かしく思ったよ。そうだ、源氏と平氏の蓮の花があった場所、今は夏だから、また蓮の花は見えなかった。違う季節に行こうって、約束してたっけ。蓮の花が咲いてる季節に、また来ようって。ちようど、あの橋のあたりで君が微笑みながら、言ってたね。

「有実！次行こうよ！」

朋美は食いしん坊だから、近くのお土産屋さんから、アイスクリームをもらってたよ。今はもらったアイス片手に、私を呼んで、はしゃいでる。その顔が、君と重なったんだ、また。君も、アイス片手に歩くのが遅い私を呼んでた。早く、早くって。それを思い出したら、何だか笑えてきちゃった。

「有実〜」

「待つてよ、朋美。早いよ」

「有実が遅いんだよお」

「しょうがないでしょ、生まれつきなんだから」

他愛無いやり取りなのに、何だか、輝いてるみたいだった。そう、君が居た時みたいに。隣で君が、笑っていてくれてた時みたいに。とつても、幸せな気分だったよ。

「朋美、待つてつてば！」

からかっているのは分かっているけど、本当に朋美は先に行きそうで怖かったよ。逸れたら、私、また会える気がしなかったから。一度は来た事がある場所なのにね。笑っちゃうよね。

「そろそろ、お昼の時間かな？」

朋美が、自分のお腹を撫でながら、嬉しそうに言ってた。ずっとこの時を待つてみたい。そういえば、私もお腹がすいてきたな。

……そうだ、この近くに、君と入ったお店があった気がするんだけ

ど、……どこだか忘れちゃったな。右だっけ、左だっけ？どっちに曲がったんだっけ？

「こっちだよ、有実」

君の声が聞こえた気がしたんだ。空耳だと思えなかったから、振り返ってみたけど、君の姿はなかった。ある訳ないのに、君は、この世にはもう居ないのに……。

「その皺やめなつて言ったじゃん！アタシ、帰っちゃうよ」

「え、え、え、え？」

ドアップの朋美の顔に驚いたし、急に帰ると言われて驚きもした。どうやら、また眉間に皺ができてみたい。注意はしてたんだけど、ダメだったみたい。

「ゴ、ゴメン、朋美。直すように努力するから」

「……ホント？」

「ホントに」

「絶対？」

「絶対に」

なんでもない事なのに、何だか楽しかった。君がいなくなつてから、こんなに笑つたの、久しぶりだった。何だか、笑う事って、気持ちが明るくなるね。

「さあ、お昼食へに行こうよ」

「うん！」

旅館に戻つてからも、露天風呂で泳いだりして、楽しかった。他のお客さんも居たけど、そんなの気にならないほど大っきなお風呂だったから、のびのびと泳いじやった。一番楽しそうだったのは、朋美だったんだけどね。

思う存分お風呂を満喫したあとは、美味しい旅館の料理を食べたよ。君と来た時と、メニューが少し変わってた。でも、美味しい事には、変わりなかったよ。

夕飯も終われば、あとは寝るだけ。だけどね、朋美とずっと朝ま

で起きてて、いろいろ話したんだ。君の事とか、朋美が今気になつてる人の事とか、君との思い出の事とか……。懐かしくつて、つい夜中まで話し込んだ。明日も、いろんな所を廻ろうつて、朋美と約束してたのに、そんな事忘れちゃった。ダメだね、女の子だけじゃ、きちつと時間に寝れないや。それでも、話題が尽きてきたら、ぐっすり眠れるようになって、私より先に朋美は寝ちゃったんだけど、幸せそうな顔してた。……私も寝たら、こんな風な顔して寝れるかな。君が見てたら、聞けたのにな。残念。

……窓から見えた星空が、家で見た星空より綺麗に見えたのは、ここにいるせいなのかな。それとも、私の中の何かが変わったからかな。それは、分からないけど、今は寝る事にするね。……おやすみ。

*

「奈留う」

「何だよ、鬱陶しい。僕は寝るんだ、静かにしてる」

友達が幽霊になると、厄介な事が、今よく分かった。特に、おしやべりな奴は、要注意だと言う事も。

「暇だあああ……」

「だったら、他のところでも行ってる」

「……他のところって？」

「……彼女の、所とか」

「……」

禁句ワードだったかな？少し、カズの顔が曇った。……多分だけど。少し透けているカズの顔じゃ、どんな表情をしているのか、なかなかつかみ難い。まあ、僕にはどうでもいい事に近いんだけど。

「つめてえな」

「何が？」

「お前に決まってるだろ、奈留」

「……悪かったな」

「なあ、起きてトランプとかやるーぜ」

「……そんなの持ってないし、電気代が勿体無いよ」

「……お前は大阪のオバハンか？」

「……好きなように言うがいいさ。どうせ、ケチですよ、どうせ」

別に拗ねたつもりはないのだが、それなりにカズは慌ててた。見ると何だか面白い。もう、死んでるって言うのに、そんな事を全然感じさせなかった。生きてる時から不思議な奴だったけど、死んでから、もつと不思議な奴になったかも。

「ゴメンな、奈留」

「……何だよ、藪から棒に」

「迷惑なんだろ、俺がいると」

「別に」

「でも俺が、何かよく自分でも分からない、想いを残しちまったから、ここにいんだろ？」

「……それが？」

「俺は、こんな体じゃ、有実にも気付いてもらえない。誰にも、触れない、見られる事だつてないんだぜ。……霊が見えるお前に、頼むしかないって事は、押し付けがましいなって思ってたさ」

「……」

「それだけじゃなくて、有実にも悪いなって思ってる。大丈夫だつて言ってたのに、嘔吐いちまったんだからな。俺の事、嫌いになつてもいいのによ、ずっと好きでいてくれてんだぜ。純粹すぎて、……でも、嬉しいんだよな」

「……そうなのか」

「正直言つて、死んだ俺の事なんて、すぐ忘れちまうって思ってたのによ、やつれるまでに、俺の事を想ってくれてたんだ。そんな

……そんな大切なもの置いて、先に逝っちゃうなんて、横暴にも程があるよな」

「……仕方ない事だったんだ、人はいずれ死ぬ、絶対に。それからは、逃れられないんだから」

「……励ましのつもりか？」

「……貶したつもり」

「はは……つめてえ奴」

……。今日は、カズについて、深く知れた気がした。生きている時と違った、不思議な奴。

4、間拔けな四歩目

朝起きて、変わらない部屋を見たけど、あいつはいた。つまらなそうに宙に浮きながら、本棚に整頓された本を眺めてた。

「……………何やってんの？」

その声を掛けてみたら、つまらなそうな顔して言った。

「……………暇だったから、眺めてた」

「本を？」

「そうだよ、なんか文句あつか？」

何故か喧嘩腰に言ったけど、触れないのだから仕方のない事だ。それに、僕には関係ないし。

「……………今日も行くのか、あそこ」

「……………カズがそう言ったんだろ？」

「そうだけどき、本当にそこに来てくれるか、今頃になって心配になってきた」

「……………」

「……………来てくれっかな？」

「さあね、……………でも、きつと来るさ」

励ましのつもりで言ったんだけど、残念そうな顔をしたのは、何故なんだろう。

*

今日は、江ノ島の水族館に行く事にしたの。新江ノ島水族館。君とは何度も行った場所だよ。君はここで一番大きな水槽がお気に入りで、ここに来るたびに必ずそこに行ってたよね。ここに来る度に、こうしてそつと水槽に触れて、子供みたいな無邪気な顔してた。…

…私、そんな君の横顔が好きだったよ。

「……眉」

隣にいた朋美が、また怒っちゃったみたい。君の事をなるべく思
い出さないようにしたいんだけど、どうしてもダメみたいで。今日
は、ここに来るまでに、十回は起こられてたかな。情けないよね、
ちゃんと生きようって思ったから、こうしてるのに。やっぱりダメ
な奴だよ、私は。

「ここにいと、その皺が消えない気がするから、他行こう」

「……え、う、うん」

何だかそこを、離れたくなかったんだけど、朋美に無理やり引き
ずられて、違う所に行かされたの。でも、どこに行っても、君の影
みたいなのが私に付きまといつて離れてくれないの。無邪気に走り回
って、私に手を差し伸べて来るんだ。「こっち行こう」って。

それを見ないように心掛けてはいるんだよ、でも、でもね。ダメ
なんだ。私は、弱いからさ。君がいると思うと、楽しくなっちゃっ
て、でも、君がいないって心では分かってるから余計に辛くなって
……。

「有実！見て、見て、でっかい魚！こんな魚、あたし、始めてみ
たよ」

「おい、有実！これ見るよ、デッケエ魚がいるぞ！」

君の声と、朋美の声が重なる事、ここに来て増えてるんだ。無邪
気に笑う君の顔が、朋美と似てるんだもの。ちよつと、びっくりし
ちゃった。

「ホントだ、おっきいね」

無理に作った作り笑い、朋美にはバレバレみただけど、何も言
ってこなかったの。それが、少し嬉しかったんだ。何でかな？

「ねえ、有実こっちにも行って見ない？」

「……いいね、行こう」

正直に言うと、あんまり乗り気じゃなかった。どちらかといえば、
自分の家に戻って、また閉じこもっていたかった。……もう、君の

事を、思い出しなくなつたのかもしれないね。振り返れば君がいるような気がして、振り返れば君が笑っているような気がして。でも、本当は、君を探していない、私が出たの。君の事を、忘れたがつてる、可哀相な私が……。

自分で、『可哀相』なんて言っちゃったら、終わりだね。自分しか可愛がってないみたいだし、自己中っぽいし。君がいなくて何もできない私が、私は嫌いだったのかも。……よく、分からないけどね。

「有実、見て見て！……綺麗だねえ」

朋美が隣で楽しそうにしてるのに、私は楽しくなかなかつた。朋美が無理してここまで来てくれてる事、昨日分かつたの。寝る前に、いろいろな事考えてたら、分かつたの。

「こつちもすごいよ、有実！」

無理しないで、そう言えたらいいのに。もう、帰ってもいいよって、言えたらいいのに。なのに、何で私は言えないのかな？……口に出して言えない事って、こんなに辛かつたんだね。

「……有実？どうしたの？」

「え？」

「……泣いてんの？」

「泣いてないよ？どうして？」

心配そうに私の顔を見てる朋美から、目が話せなかつたの。朋美が、君に見えたの。

「有実」

君がそう私を呼んだ気がして、朋美から、目が離せなかつたの。悲しそうな君の眼に、涙があつた気がするんだけど、気のせいじゃないよね。だって、本当に君がそこにいるみたいに見えたから。

「か」

君の名前を呼びそうになつたけど、それ以上言えなかつた。だって、君の名前を呼んでしまつたら、私が私じゃなくなる気がしたの。私が、崩れてしまう気がしたの。身勝手な事は、分かつてる。だけ

ど、本当にそう思ってたの。ずっと、ずっと。君がいなくなってる、ずっと。

「有実？」

今度は、朋美の声が私を呼ぶの。幻覚じゃないって分かってても、幻聴じゃないって分かってても、君が本当に見えたから。君が、『今』のような気がしたから。

「ねえ、無視しないで」

頬を優しく叩かれて、やっと自分に戻れた気分。朋美がね、不安そうな顔して、私を見てるの。今までの私と違う私を見て、困ってるんだろうね、きつと。

「……有実、なんか今日、暗くない？」

「……そんな事ないよ、普通だよ」

微笑んで見せたけど、余計に心配させちゃったかな。自分でも、情けない顔になってるって、分かったから。水槽に映ってる自分の顔、とつても情けなかったんだ。人形みたいな、冷たい顔してたから。

「他、行こっか」

「……うん」

もし、君が今の私を見たら、何て言ってたかな？変な顔してる？馬鹿みたいだな？……。きつと、情けねえ面してるな、みたいな事言ってるだろうね。そうして、私の頭を撫でて言うんだ、笑えよつて。最期の時みたいに、私に言うんだ、笑えつて。きつと、……：そっうだよね？

水族館を出てから、私は朋美とろくに口利いてなかった。何か話しかけられても、薄く返すだけで、ぼうつとしてて、つまらないって思われただろうね。

「……そろそろ、家に帰ろっか」

「え……。そう、だね」

家に帰りたかったのは、私じゃなくて、朋美だったかもしれない

な。こんな私と一緒に居ても、どうせ、つまらないだろうから。たった二日だったけど、私は余計に暗くなった気がするの。君との思い出の地を巡ったから？それとも、私が元々暗かったから？……ダメだ、私じゃ分からないよ。君がいないと、何もできないの。君が傍に居てくれないと、。

荷物をまとめて、旅館を出て、電車に乗ってる頃。その電車から見える浜辺に、君が立っていた気がしたの。風に吹かれて、たった一人で立ってるの。座り込んだ君の背中がやけに小さく見えて、不安になったよ。何で、そんな悲しそうなって。

そうやってずっと見てたら、振り向いてくれた。でも、物陰に隠れて、君の顔は、見えなかった。でも、あれは君だった気がするの。どうしても、そう思いたいのかもしれないけど、あれは、君だった気がするの。

5、決意と共に、五歩目を

カズに頼まれてから、ずっとカズの言っていた場所で待ってみているけれど、彼女は来ない。夏だから、観光客と一緒に、サーフィンをやっている人に紛れて、僕が分かりづらいのかもしれない。まあ、見つけてくれたとしても、知らない男に声は掛けてこないだろう。そんな軽い奴じゃないって、カズも言ってたし。そこは、信用してもいいと思うけど。

「はあ……、今日も来ないんじゃない？」

「……もうちょっと、待ってみてくれよ」

「……ちょっとだけ……ねえ」

ため息を吐いてみたけど、気分はスッキリしなかった。もっと早く来てくれるかと思ってたけど、ちょっと考えが甘かったかもしれない。なあ。はあ……。

「……有実」

そうやってカズは、時々彼女の名前を呟く。そして、ため息混じりに悲しそうな顔をするんだ。何故か　彼女がいない僕には分からないけど　、やっぱり会えないと寂しいのかもしれない。

ふと、視線を感じた気がして、後ろを振り返ってみたけど、誰もいなかった。涼しげな風鈴を鳴らして、アイスを売っているおじさんはいたけど。その肩越しに電車が見えただけど、そこから見てたとしたら、たった一瞬しか僕の姿は見えなかったと思う。だから、電車からつてのはない。また、幽霊が見てたのかもしれない。たまにあるからな、そういう事。

結構それから待ってみたけど、やっぱり来なくて、カズは寂しそうだった。僕はどうでもいいんだけど、絶対来るって思った場所に待ってても来てくれないってのは、辛いのかな？よく分からないけど、励ましてやった方がいいかな？

「カズ、そんな落ち込むなよ」

「……落ち込んだんじゃないねえよ」

「でも、暗くね？」

「……気のせいだよ、きつと。……それよか、お前は大丈夫なのかよ」

「何が？」

「……熱っぽいんじゃないか？」

「……大丈夫だよ、すぐ治るさ」

確かに今日起きてから、少しだるかった。だから熱を測ってみたけど、平熱より少し高いだけで、咳もないから大丈夫だろうと思ってた。あの時、カズはいなかったはずなのに、何で今日、僕の体調があんまり良くない事、知ってるのかな？……昔っからそうだった気がするけど、よく人の変化が分かる奴だなんて思った。少し元気がないだけでも、怒ってるだけでも、すぐに気付くのはカズの特徴だった。……その代わり、自分の事には鈍感だったような……。

「帰ろうぜ、これ以上ここにいても、来ないだろうし」

悲しそうに言って、カズは立ち上がった。っていうか、浮かび上がったの方が、正しいのかも。

「じゃあ、また明日、待ってみるか」

うーん、と伸びをした時気付いた事、それは、カズが泣いてた事。幽霊が泣くのかって思ったけど、あれは確かに泣だった。半透明だけど、悲しい気持ちは、しっかりと伝わった。

*

家に帰ってから、あの浜辺の人の事が気になってたの。……好きとかそういう事じゃないって事は分かっているとと思うけど、あの後姿が、君にそっくりだったの。……君に、見えたの。違っと思って思え

ないほどそっくりな、大きな背中。でも、どこか頼りなくて、支えてあげなくちゃって思う、あの背中。

「君なの……？」

声に出して言ってみたけど、返事なんて、くる訳なかった。きたら奇跡だよ。とつても嬉しい奇跡。

夕飯を食べてる時も、お風呂に浸かってる時も、寝る前も学校に行く時も、授業中でもあの背中が気になってた。寂しげに見えた、あの背中が、どうしても忘れられなくて。

でも、でもね、あの浜辺に行くのが、……怖かったの。君との思い出が、一番強い所だったから。旅行に行くって決めた時、あそこに行ってみようって思ってたんだよ。でも、途中で怖くなっちゃって、朋美にその事も言えなかった。恥ずかしいって事もあったけど、そこに行くのが、何よりも怖かった。

それでも、毎日あの背中が頭の中に浮かんで、私を困らせようとするの。行って欲しいんだって、君が言っているのかもしれない。でも、そこに行ったら、君が消えてしまう気がしたの。本当に、心の中からさえも、君に逢えなくなってしまうような、そんな気がしたの。それは、嫌だったから、私はそこには行けないの。……ゴメンね。本当に、ゴメンね。

忘れようって、思い続けたよ、それからずっと。思い出さないように、わざと他の人達と仲良くしゃべって、あの背中を忘れようとしたの。思い出さないように、もう考えないように。

でも、どうしてなんだろうね。あの背中は、君じゃないのに、忘れる事が出来ないの。忘れようとすればするほど、余計に深く私に突き刺さってくるの。そう、まるで指に刺さった棘みたいに。私の心に刺さって、抜けてくれないの。どうしてだか、君には分かる？ 私には、……分からないよ。全然、分かんない。

『有実、見てろよ。俺のすんばらしい泳ぎを』

『お前も来いよ、有実！楽しいぜ！』

『……つかれたあ。おい、有実。そんなに泳ぎ上手かったのかよ。

知らなかつたぜ』

『……………有実。俺、……………お前が好きになつたみたいだ。付き合つてくれないか?』

『……………え、マジ!? ホント!? お、俺でいいのかよ!! マジ大好きだよ、有実!』

あの背中が、君の言葉を思い出させるんだ。何でか、それが分からないんだ。君じゃないのにだよ? 全然関係ない人のはずなのに、君の言葉を、思い出させるの。くだらない言葉も、大切な言葉も、全部あの背中が持つてる気がするんだよ。何でだと思つ? ……君なら、どうする? ……あの背中に逢いに、行つてみる?

私一人じゃ決められないよ。どうしたらいいの、答えて。君が行つて欲しいつて言うんなら、絶対行くから。君のために、行くからねえ、答えて。

「……………有、実」

名前を、呼ばれた気がしたの。私の名前を、君が呼んだ気がしたの。でも、振り返つても、枕の下を見ても、クローゼットの中を見ても、どこを見ても君がいないの。君の姿が見えないの。もし、本当に私の名前を君が呼んでくれたのなら、もう一度呼んで。お願い。もう一度でいいの。そしたら、きっと決意が出来る気がしたから。

「ねえ、呼んで……………」

そう、口に出して言えば、君が現れて、私の名前を呼んでくれるような気がしたよ。でも、君は現れなかった。声も、聞こえなかった。静かな部屋で、ひとりぼっちなのが、余計に寂しくなつちゃうよ。ねえ、名前だけでいいの。呼んで、呼んで。

「……………か、一輝」

「……………有実」

久しぶりに呼んだ君の名前に答えるように、君が私の名前を呼んでくれた気がしたの。空耳だったかもしれない。でも、それは君だつたと思つたの。あの声は、君だと思つたの。

だから、私、行つてみようと思つたよ。あの背中に逢いに。変な事

で、決めた事かもしれないけど、君が、行って欲しいって言ったか
と思ったから。あの背中が本当に、君なのかもしれないと思ったか
ら。

だから、あの背中に逢いに行くよ。……でも、行くとしたら、一
回だけで許してくれるかな。あそこは、君との思い出が詰まり過ぎ
てるから、きつと長い時間いると、泣いちゃうだろうから。だから
一度だけで、許して。ゴメンね、身勝手で。それでも、許して欲し
いの。逢う事を。逢いに行く事を。……一輝。

6、進む為の六歩目

今日も、あの浜辺で彼女を待とうと思っていたけれど、何だか、体が重かった。それに、額に手の甲を当ててみたら、昨日より熱が上がっているような気がした。念のため、体温計で測ってみたけど、やっぱり昨日より上がってる。頭もクラクラするし、何だか気持ち悪い。

「……奈留、大丈夫か？」

「……ちよつと、ダメそう、かな」

「……昨日、無理しすぎたからか？」

「そのせいじゃないと思うけど……今日は、あそこに行けなさそうだ」

そう言ったら、カズの顔が曇った。何か、いけない事でもあったのかな？今日じゃなくちゃいけないような、大切な事。

「……ゆつくり休め」

それだけ言い残して、カズは消えちゃった。消える瞬間に見たカズの顔は、切羽詰ったような顔だった。何か理由がありそうだったが、聞く間もなく消えてしまったので、聞くに聞けなかった。

奈留が行けないと、今日だけは困る。昨日の晩に、有実の部屋に行ってみた時、あいつは言ってたんだ。今日だけは行ってみるって一度だけだつて。だから今日、この機会を逃すと奈留は、もう二度と有実に合えないかもしれない。それは、困るんだ。奈留が行かねえと、あれが渡せない。

「どうしたらいい……、どうしたら」

奈留に事情を言つて、行ってもらう方が嬉しい事は分かっている。

でも、それは奈留の病状を悪化させるかもしれない。……たかが熱くらいで死にゃあしねえと思うけど、無理はさせたくない。死んだ俺の代わりに、やってくれようとしてくれる事があるのだから。こ

れ以上、迷惑はかけられねえ。

でも、このチャンスは一度きり。これを逃せば、またいつ来るか、分からない。来ない可能性だってある。……その可能性のほうが、多いし。だからと言って、病人に無理はさせられねえ。

俺がこうして悩んでる間にも、あいつはあの場所で、俺の事を待っててくれるかも知れねえ。……いや、俺じゃあねえか。俺じゃなくて、奈留を待ってる。今の、あいつは。

「……ズ、カズ」

俺を呼ぶ、奈留の声がする。でも、いつもみたいに明るくはない。死ぬ前の、俺みたいな声だ。そんな奴に、やっぱりあの場所には行かせられねえ。

「何だよ、奈留」

身支度を整え終えてる奈留を見て、俺は戸惑った。

「……お前、熱あんのに、行く気かよ」

「……今日じゃないと、いけない理由があるんだろ？……分からねえけどさ」

照れくさそうに言った奈留が、頭をかいている。照れ隠しのつもりだ。いつもそうしてたから、覚えちゃったよ、全く。

「……さあ、じゃあ行こうか」

*

君の背中があつた場所。君とそっくりな背中があつた場所。そこに座って、君を待ってるの。でも、来ないよね、きつと。だって、君はいないんだもの。この世界には、もう。君からもらったお気に入りの髪留めを付けて、君に分かりやすいようにしたつもりなんだ。分かるかな？気付けてくれるかな？

恋人や、サーフィン仲間と一緒にいる人達が周りに多くてね、私、

かなり浮いてた。恥ずかしいって思ってたけど、君が来てくれるかもしれないって思ったら、そんな事、どうでも良くなったんだ。本当だよ、嘘じゃないよ。

一人で浜辺に座ってるのって、こんなにつまらなかったっけ？　こんなに、悲しかったっけ？

あの時は一人で座ってても、絶対に海から君が上がってきて、疲れたって言って、私の隣に腰掛けてくれた。……だから、一人でもつまらなくなかったんだらうね。話しかけてくれるから、悲しくなかったんだらうね。

私の前で、仲良くしてる恋人達を見ると、寂しくなるの。どうしてそんなに楽しそうなのって聞きたくなるほど、馬鹿みたいに笑ってるから。誰から見ても、とっても楽しそうだったから。それが、羨ましかったのかもしれないね。私の隣に、もう君がいないから、他の人達に、焼き餅焼いてたのかもね。……きっと、そうだよね。

どうせ来ないだらうって、分かっているのに。あれは、幻だって分かっているのに。何でこんなに待てるのかな。他にする事がないから？　それとも、君が来てくれると、信じてるから？　どっちだらうね。もし、最後のだったら、ちょっと自分がカッコイイな。だって、信じて待ってるんだよ？　来ないと分かっている人の事。どうせ来ないなら、他の所行っちゃうのに、律儀に待ってるんだよ。笑えるかもしれないけど、そういうの、私は好きだな。

明るすぎる夏の日差しも眩しかったけど、楽しそうに笑っている人たちのほうが眩しくて。細めた眼の先に、君が見えた気がしたの。塵気楼だらうと思って、目を逸らしたんだけど、それは動いていたの。私に向かって、歩いて来てくれたの。心臓が、飛び出しそうだった。

「……………」

君の名前を呼ぼうと思ったけど、それは君じゃなかった。全然知らない人。でも、どこかで会ってる気がして、怖くなかったの。

「……………」君、誰？」

「え、あの、……別に怪しい者じゃないんですけどね」

そう言ったその人は、でも、少し怪しかった。夏の浜辺に、ジーンズに袖まくりしたワイシャツだなんて、場違いな気がしたの。私は、一応ここの雰囲気に合わせて、白いワンピースで来たのに、私が場違いみたいに見えるてきちゃった。

「……」

「……」

その後もね、何も言わないでその人は私の前に立ってるの。何か言いたそうなんだけど、言えないみたいだったよ。もしかしたら、人見知りなのかも。そう気付いたの、結構時間が経ってからだった。

「あの」

ベタな事って、ホントにあるんだね。二人の声が揃うやつ、あれ、何回も撮り直して出来てるやつだって思ってたの。それがね、たった一回で出来たの。私的には、少し驚いたな。

「先に、どうぞ」

「え……あ、はい。あの、君も誰か待ってるの？」

「一応、そうですね」

「誰を？」

「……死んだ友達の恋人」

しばらく言いにくそうにしてから、彼はそう言ったの。正直変な人だなんて思ってたの。逃げちゃおうかなって思っただけど、逃げる気がしなかった。死んだ友達。それがもし、君だったらって、思ったからだよ。

「僕からも、確認させてもらいたんですけど」

「何ですか？」

「君、有実さん？」

いきなり自分の名前を呼ばれるなんて、思ってもみなかった。かなり予想外で、変な顔してたと思うよ。君が爆笑しそうなくらいに、情けない顔に。

「……そう、ですけど？」

「なら、良かった。これ、君の彼氏からです」

そう言っただけがポケットから出したのは、拳銃じゃなくて、手紙だった。随分汚れてるみたいだけど、間違いない手紙だった。受け取ったその手紙にはね、君の字で、『有実へ』って書いてあった。懐かしい、ちよつと雑な字。

「渡して欲しいって、君が出かけた頃に、言われたんです。……信じてくれないと思うけど、幽霊になった、カズ……じゃなくて、一輝に」

何か、お礼を言った方がいいとは、心で思ってたけど、言葉が出なかった。君が、私に手紙を書いてくれてたなんて、知らなかったから。そんな事してた事すら、知らなかったもの。

「呼んでみて欲しいって、一輝が言ってるよ」

「……ここに、いるの？」

「……見えないだろうけどね」

それを聞いたなら、私はもっと嬉しくなった。見えなくても、君がいてくれるなら、ただそれだけで嬉しかったから。

砂っぽい手紙を開くと、やっぱり君の字で内容は書かれてた。懐かしい字の一つ一つが、心に染みるようだったよ。ジジ臭いかもしれないけど、本当にそうだったの。

その手紙にかかれてた内容は、こうだった。

7、幸せは7歩目に

有実へ

おまえが、この手紙読んてる頃、俺は隣にいないと思う。ていうか、絶対いないと思うけどな。

こんな手紙、ホントは書く気、なかったんだぜ？マジで。

でもさ、なんか残したいなあって思ったらさ。手紙が良いなって思ってたよ。んで、今この手紙を書いてんだよ。笑うなよ、『雑な字』とか言つて。……自分のにはかなり上手いと思ってるんだからさ。

ジシンカジョーだな

そんな事、どうでもいいけどさ、有実。一人になったからって落ち込んでんじゃねえぞ。もし、落ち込んだ気持ちでこれ読んてるんなら、すぐさまこれは捨てる、良いな？そんなやつに、読んでもらいたかねえから。

それと、この手紙、俺から渡せなくてゴメンな。それだけは勘弁してくれ。俺が手渡し出来たらよかったんだけどさ、いざ渡すとなると照れくさくつてさ。しかもさ、これ読んで泣かれてたら、かなり焦るしさ。だから、それは許してくれよ。

それはそれとして、どこかそこらへんに置いといて、本題に入るぞ。

お前、俺が死んだからって、塞ぎ込んでねえか？暗くなってねえか？……もしそうなってるんなら、いつもみたいに、無邪気に笑えよ。お前の辛気くせえ顔なんて、キモくて見てらんねえからさ。……笑えよ、いいな？約束だぞ？

手紙なんて、幼稚園でセンサーに向けて書いて以来、久しぶりに書いたからさ、ヘンな所あっても、ツツコムなよ？……久しぶりに書くつて、かなり緊張するんだからな。そんな気持ちを踏みにじる

なよ。……頼むからさ。

今のお前は、幸せに笑ってられてるか？誰かにイジメられてたり、不登校になってたりしてねえか？俺が死んだら、その事が気がかりで、お前の所まで出てくるかもよ？……なあってな（笑）

でも、本当に大丈夫か？まだ死ぬって決まった訳じゃねえのに、何でこんなに悲しいのかな？……てか、この、胸の中のモヤモヤ湿っぽい感じ、これ、悲しいつつうのかな？

お前にもあるか、こんな感じのやつ。だったら、悲しいじゃなくて、寂しいのかもな。

俺、正直言つて、死ぬのはあんまし怖くねえんだよな。お前を独りにしちまうのが、怖えわ。……今、ベタな事書いたなって、自分でも思っただけだし、本当にそうなんだよ。死ぬ事より、大切なお前を一人にする事の方が怖い。……それに、悲しいんだ。

お前、独りぼつちは嫌いな夕チだろ？だからさ、周りに友達がいなくても、自分一人で考え込みそうなんだよな。独りぼつちが嫌いなはずなのに、自分から独りぼつちになってどうすんだよ。お前の周りにはさ、いっぱい友達がいんだから、何か不安な事があったりしたら、ちゃんと打ち明けるよ？一人で考えるなよ、助けてもらえよ、友達に。

最後になるけどさ、俺の事、別に忘れても良いからな。お前が俺の事を忘れて幸せになれるんなら、そっちの方がいいからよ。笑えよ、幸せになれよ、有実。なんか今、ジジ臭い事言っただけがするけど、笑ってごまかしてくれな。

有実、お前は俺みたいに病気で死んだりすんなよ。海みたいにしておらかな人で、安らかな最期、迎えてくれよ、俺の代わりにさ。海みたいに誰にでも優しく、寛大な人であれよ、有実。……俺は、お前のそういう所が好きだったんだからさ。それだけは、曲げないでくれよ。

今、この腕にお前を抱いて、「俺は、今までお前を幸せに出来たか」って聞いたら、どんなに良いんだろうな。「お前は俺といて、

幸せだったか」って聞いたら、どんなに良いんだろう。なんか、今更になつて泣けてきたよ。俺は本当にお前を残して、死ぬかも知れねえもんな。お前を置いて、先に逝つたとしても、お前は俺の事を許してくれるか？こんな頼りない俺を、心のどこかで想い続けてくれるか？

……何言つてんだろな、身勝手な事言つてよ。この手紙だけでも、何回お前に約束したんだ？頼んだんだ？なっさけねえや。男のくせに、お前に頼つてよ。この重荷、背負わなくて良いから、お前は自由に生きる。お前を幸せにしてくれる、唯一の人と幸せになつて、俺にできなかった、幸せな家庭を築いてくれな。最後のお願いだ。

最後つて言ったのに、まだこんなにちんたらちんたら書いてゴミな。これが、本当に最後だから。よく聞けよ。……てか、よく読めよ。

この世に生まれてきてくれて有難う、有実。お前のおかげで、俺は幸せだったぜ。毎日が、かなり楽しかった。かなり幸せだった。夢みたいなさ。

有実。お前は、幸せだったか、もう聞けないけど、今まで本当に有難う。俺みたいなのと付き合ってくれて有難う。優しさを俺にくれて有難う。俺にとって、お前が海だった気がする。

心から有難う、大好きな有実。

8、明日に向かうために

その手紙読んで、私が泣かないと思った？泣くに決まってるでしょ。泣くなつて、書かれてても、泣くに決まってるでしょ。笑う事なんて、できる訳ないもの。こんな手紙書いてる事、全然知らなかったんだもん。嬉しくって、悲しくって、泣くに決まってるよ。

「……あの、泣いてるところ悪いけど、……信じてないならそれでいいんだけど、幽霊になった一輝は、ここにいるんだ」

そう、男の人が言つて、私の目の前を指すの。何も無いのにだよ。おかしいなつて思つたけど、信じる事は出来たの。だって、君の友達みたいだから、その人。

「何か言えば、カズにも聞こえるよ」

「……そうなの？……えっと」

「笹山です。僕は笹山奈留です」

「……じゃあ、笹山君。本当に、私の前に、彼はいるの？」

何も言わないで、彼は頷いただけだった。でも、どこか悲しそうだったんだ。それはきつと、私が君の事を名前で呼ばなかったからだろうね。私はね、まだ君の名前を呼ぶ事に抵抗があるんだ。君がいた時は、そんなの気にしてなかったのに、いなくなってから、君の名前が呼びにくくなったの。何でか分からないけど、呼べなかったの。

「……何を言つても、彼には聞こえる？」

「絶対に、聞こえます」

『絶対に』を強調して彼は微笑んだの。それが、君と重なって見えたの。きつと、この笹山君が、あの寂しげな背中の中体だね。だつて何だか、この人君に似てるんだもの。雰囲気と言つか、身に纏つてるオーラみたいなのが、同じように思えたの。……君はどう思うかな？

「……独り言に聞こえますよね？」

「他の人から見れば、当然ですね」

「じゃあ、独り言をこれから言うんで、少し、無視してもらえますか？」

「いいですよ」

やっぱり君に似てる微笑みで、彼は笑った。

見えないはずなのに、君がいるのような気がして、目の前にはもう、君が笑っているような気がした。そんなはずはないのに、君は私の前に立ってるの。私を真っすぐに見下ろして、寂しそうな顔してるの。

「……私は、君がいなくなった事が、今でも信じられないの。君が、私を置いていくはずがないって思ってるの。……でも、それは自分勝手な妄想だよ。分かってたんだよ、君はもう私の隣にはいないって。分かってたんだよ、もう君は生きていないって」

その言葉を、君が聞いているのか、私には分からない。でも、君はしっかりと聞いていてくれる気がして、周りの目なんて気にならなかった。そんな事、どうでもいいように思ったの。

「君がいなくなったあの日、すごく悲しかった。すごく、辛かった。君ともっとたくさんの日を過ごしたかったし、君との約束もたくさん残ってたから」

それは、本当の事なのに言い訳めいて聞こえたのは、私だけかな？君がいなくなっただけからの自分をごまかす為の言い訳に聞こえるのは、私だけかな？

「……こんなに君に心配されて、私は幸せ者だね。なのに、悲劇のヒロインみたいに、落ち込んで塞ぎ込んで、馬鹿みたい。世の中には、もっと不幸な人達がいるのに、自己中だね。情けないよ、自分。君の、こんな気持ちに気付けなかった私が、とっても情けない。とっても馬鹿みたい」

涙が止まらないのは何でかな？もう君が、幽霊だから？独り言を言ってる私が哀れだから？

「……この手紙書いてくれて、有難う。嬉しいよ。君のいるんな
気持ちがあつたから。ほんとに嬉しかった。……こんなに涙がで
たのつて、久しぶりだな。君がいなくなつて以来かな？……私つて
ほんとに薄情な女だね。君がいなくなつた時しか、ほんとの涙だつ
た訳じゃないんだから。」

でも、この涙は本物だよ。嬉しすぎて止まらない涙だよ。こんな
に君が私の事を思つてくれてたなんて知らなかつた。こんなに大切
に思つてくれてるなんて、……嬉しくてどう言つたらいいか、よく
分からないや」

君がいるはずのところを抱いてみた。だけど、君の暖かさが伝わ
つてこなくて、寂しかったよ。でも、そこに君がいると思えば、こ
こに一輝がいると思えば、何だかとても暖かいんだ。君の鼓動が
聞こえるように。君の腕が私を抱いていてくれるように。君が、
私と同じように泣いているように。

「この腕を抱いて、君がいないのが悲しいよ。でも、ホントはい
るんだよね。きっと、いるよね。だから、君の問いに答えるよ。…
…私、き……一輝と居られて、とっても幸せだった。毎日が輝いて
見えてたもん。だから、とっても、とっても幸せだったよ。」

……だから有難う何て、言わないで。頼つてたのは、私のほうだ
もん。私に言わせてよ。有難う。私、一輝が生まれてきてくれて、
嬉しかったよ。一輝と出会えて、ほんとに良かった。初恋の人が、
一輝でよかったよ。だから私は、とっても幸せだったよ。

戻つて来てなんて、もう言わないから。声を聞かせてなんて、も
う言わないから。どうか、安らかに眠つて欲しいよ。……私なら、
もう心配いらさないよ。一輝の手紙が力をくれたから。一輝の優しさ
が、私を前に押ししてくれたから。もう、後ろは振り向かないし、戻
らない。だから、どうか安心して眠つて。私はもう、大丈夫」

まさか、抱いてくれるとは思わなかつた。話しかけてくれる事さ
えも、ただ薄っすらと希望を抱いてるだけで。なのに、お前は奈留

を信じて、俺も信じてくれた。こうして、話してくれた。もう、心残りはないと、教えてくれた。大丈夫だと、お前が言ってくれたから。そして、やっと名前を呼んでくれたから。

ずっと、ずっと待ってたんだ。お前が俺の名前をまた読んでくれる事を。もう、読んでくれないのかと思っただけど、お前はいつもみたいに読んでくれた。それが、何よりも嬉しい。手紙も読んでくれたし、名前まで読んでくれた。

だからもう、俺は休めるよ、有実。

初めて人が成仏する瞬間を見た。いつも、話している友達が、消える瞬間を見た。薄っすらと浮かんでいたカズを、有実さんが抱きしめた辺りから、カズは消え始めた。足からそっと、風に流されるように、光のくずとなつて、散っていく。まだ有実さんが話しているのに、もう半分くらい、消えかかっていた。ああ、まだ消えないで。

カズが、もう満足できたのは、その時分かつたけど、消えるという事は、もう会えないという事。もっと話したかったし、もっと一緒に居たかった気がする。幽霊の姿になつて、僕の家に来てくれた時、ホントは少し嬉しかったのかもしれない。鬱陶しいと思つたけど、ホントは少し楽しかったのかもしれない。

有実さんが話し終えた時、もう君は頭しか残っていなかった。もう、消えてしまう、その刹那にカズが僕のほうをむいて、何かを言つたよな。口の動きだけ出し、ぼんやりした頭だったから、確かじゃないけど、あつてるとしたら、『有難う』。そうカズは言つただよな。

お前、そんな誰にでも有難うなんて言える質じゃないのに、僕にそんな事言つてる暇があつたら、彼女に言つてあげるよな、馬鹿野郎が。

「……………もう、一輝は成仏できましたか？」

「はい。綺麗に消えていきました。きっと、もう悔いは残っていない証拠です」

「そう、ですか……」

「……そうだ、最後にカズは有難うって言ってました。僕に向けて言ったのかもしれないけど、僕にはそうは思えないので、有実さんに向けて言ったんだと思いますよ」

「本当ですか。……今からでも、まだ遅くないでしょうか？」

「……はい？」

「私こそ、有難う！一輝　　！！」

とびつきりの笑顔で、そう空に叫んだ私の声、君に届いたかな？届いてたらしいな。

一輝は、自分の事を忘れろって言ってたけど、私は忘れないからね、意地として。絶対に、忘れてやるもんか。ずっと覚えててやるんだから。

それから私が家に帰ってまずした事、それはね、倒してた写真立てを起こす事。その写真立てにはね、君が写ってるの。一緒に海の前で撮った写真だよ、君は覚えてるかな？その君の顔は、とっても幸せそうに笑ってるから、あの時の私には、少しキツかったの。

でも、今の私なら、君に向かって笑えるよ。幸せだった事が、身に染みて分かったから。

もう私は、ひとりで生きていけるよ。君に頼らないで、真つすぐに生きていける。迷う事も、道を間違う事もないよ。自分で決めた道、真つすぐ歩いていくからね。君の分まで、私は立派に生きなくちゃいけないんだから。もう、メソメソしてられないもんね。

……君が言っていた海のように、君の望んだ海のように、私はなれていないと思うの。私はまだまだ、君の海にはなれてない。……まったく、一輝のレベルは高いんだから、そうなるまでに、何年かかるか分かったもんじゃないわ。だけど、そうなるように、私は頑張るからね。海のように、優しい人になれるように、努力するよ。

……そうね、例えば人のために唄う海みたいになろうかな？君が
言っていた望みと、少し違うかもしれないけど、人のために、人の
心を癒すために唄う海。そんな海、素敵じゃない？本当には、唄わ
ないよ、例えなんだから。歌のように人を包みこえるような、海の
ように、人を楽しませるような人に、私はなろうと思うの。君が褒
めてくれた部分を生かして、伸ばしていけば、そんな人になれるよ
ね、きっと。

だから私は、唄う海みたいになるよ。大切なものの為に。

8、明日に向かうために（後書き）

初めて恋愛（？）モノを書かせもらったんですけど、どうでしたか？いまいち納得のいく作品とはいえないのですが、最後まで読んでくださった方、有難うございます。

また、何かの機会に出会ったら、暇つぶしに読んでもらえたらいいと思います。

では、『唄う海のように』を最後まで読んでいただき、本当に有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2358d/>

唄う海のように

2010年10月10日06時35分発行